

「*iの折れ」再説 — ハルハ方言と オルドス方言の発展の平行性 —

栗 林 均

はじめに

筆者は本誌前号に、「『*iの折れ』考 — 蒙古語における*i音の発展の規則性と不規則性 — 」と題する一文を寄稿した。⁽¹⁾ そこでは、主として蒙古語ハルハ方言の「折れ」をとりあげ、従来の図式を再検討して、これに若干の新しい解釈を試みた。

すなわち、「折れ」は蒙古語史において第1音節の母音*iが後続音節の母音に同化する現象であるが、ハルハ方言にはタイプの異なる2種類の「折れ」を認めることができる。ひとつは、「折れ」によって先行子音の口蓋化やわたり音iなど、なんらかの程度に母音*iの痕跡を残しているタイプであり、他は母音*iの痕跡を全くとどめないタイプの「折れ」である。上記拙稿では *mingra > mi'aggε や *jida > džaddε 等、前者のタイプを「不完全な折れ」と呼び、*miqan > maxxε や *jirasun > dzaqεs 等、後者のタイプを「完全な折れ」と呼んでその多様なあらわれを検討した。この観点からすれば、ラムステッド⁽²⁾によって公式化されて以来、ウラディーミルツォフ⁽³⁾やポッペ⁽⁴⁾らによって支持されてきた伝統的なハルハ方言の「折れ」の図式は、両種の「折れ」を混同した、不十分なものとせざるをえない。

本稿では、上述の主旨に沿って、ハルハ方言の「折れ」を、オルドス方言との比較によって考察する。ここで、比較の対象としてオルドス方言をとりあげるのは、第1音節の*i音が、特に母音*aの前に位置する場合、両方言間にきわめて興味深い関係を見い出せることによる。したがって、この小論では、主として第1音節の*i音が第2音節の母音*aに先行する場合の、両方言における発展の関係を検討する。

あらかじめ指摘しておかなければならないことは、母音*aに先行する第1音節の*i音は、ポッペの示すように、両方言で全く等しい発展をとげているわけではない、ということである。ポッペによれば⁽⁵⁾、「*aの前の*i」は、オルドス方言

で a (語頭で ja) としてあらわれる、と説明されている。しかし、実際は、オルドス方言は蒙古語諸方言のうちでも、むしろ第 1 音節に母音 i を最もよく保存している方言のひとつであり⁽⁶⁾、上の説明は、この方言にふんだんに見い出される第 1 音節の i (a の前) を無視したものである。

このようなポッペの図式とはうらはらに、蒙古語諸方言のなかで、かたやハルハ方言は最も広範囲に「折れ」を蒙った方言であり、かたやオルドス方言は第 1 音節に最もよく母音 i を保存している方言のひとつに数えられる。この両極端に位置する二つの方言の発展には、見かけの違いを越えて、ポッペが示したのとは全く別の発展の平行性が存在するのである。

以下、第 1 音節の *i 音 (母音 *a の前) の発展を、語頭子音の種類により、1) *b, *m, *n, *g, *k 2) *j, *č 3) *s 4) φ (ゼロ) に分けてそれぞれの方言における発展を見ていくことにする。なお、第 2 音節の母音 *a が *aru (>長母音 ū) の連結をなす場合の発展はあとで一括して論じる。

1. 語頭子音が *b, *m, *n, *g, *k の場合

蒙古文語で語頭に bi-, mi-, ni-, gi-, ki- の連結をもつ単語の i に対応して、ハルハ方言では母音 ⁱa あるいは a があらわれる。これは、ラムステッド以来、「*a の前の *i > ⁱa, a」と公式化されて、よく知られた事実であるが、この場合、母音 ⁱa と a の違いについてはこれまででしかるべき配慮が払われてこなかった。

このようなハルハ方言の「折れ」を、オルドス方言の「折れ」と比較すると、次のような事実が明らかになる。すなわち、上と同じ条件にある蒙古文語の i に対応して、オルドス方言では母音 i があらわれる単語と母音 a があらわれる単語の 2 種類が観察されるが、オルドス方言で母音 i をもつ単語にはハルハ方言で母音 ⁱa があり、オルドス方言で母音 a をもつ単語にはハルハ方言で母音 a があらわれている。この関係は、後で検討する少数の場合を除いて一定していて、入り乱れることがない。

まず次頁の表 1. を参照されたい。⁽⁷⁾

ここではオルドス方言の第 1 音節の母音 i に対して、ハルハ方言の母音 ⁱa (現代正書法では ʰ) が対応している多数の例を見い出すことができる。

表 1.

Mo.	Urd.	Kh.
<i>bila-</i>	<i>bila-</i> " enduire "	бял- "мáзать"
<i>bilqalja-</i>	<i>bilxal.özi-</i> " ballotter "	бялхалз- "чуть-чúть не пере- лúться чéрез край"
<i>bilta</i>	<i>bilta</i> " mèche de fusil "	бялт "фитúль"
<i>bira</i>	<i>bira</i> " force "	бяр "сúла"
<i>milaya-</i>	<i>milā-</i> " faire le rite de l'onction "	мялаа- "угощáть"
<i>mindasun</i>	<i>min.dasy</i> " fil de soie "	мяндас "шелковúнка"
<i>mingyan</i>	<i>ming.a</i> " mille "	мянга "тúсяча"
<i>miraya-</i>	<i>mirā-</i> " épier "	мяраа- "подкрáдываться"
<i>mitara-</i>	<i>mi't'ara-</i> " mettre à quia "	мятар- "терáть увéренность"
<i>niyta</i>	<i>niç't'a</i> " peu espacé "	нягт "плóтный"
<i>nilqa</i>	<i>nilxa</i> " jeune "	нялх "новорождéнный"
<i>nirai</i>	<i>nirā :</i> <i>nilxa</i> ~ " enfant dans les langues "	нярай "родúвшийся недáвно"
<i>nisal-</i>	<i>nisal-</i> " tuer en écrasant entre les ongles des pouces "	нясал- "шéлкать пáльцами"
<i>gilayar</i>	<i>gilag.ar</i> " louche "	гялгар "блестáщий"
<i>gilbalja-</i>	<i>gilbaldzi-</i> " étinceler "	гялбалз- "сверкáть"
<i>kilayana</i>	<i>k'ilag.ana</i> " nom d'une herbe "	хялгана "ковúль"
<i>kilbar</i>	<i>k'ilbar</i> " facile "	хялбар "лéгкий"
<i>kilyasun</i>	<i>k'ilg.asy</i> " crin "	хялгас "вóлос"
<i>kimda</i>	<i>gimda</i> " facile "	хямд "недорогóй"
<i>kina-</i>	<i>k'ina-</i> " faire quelque chose avec soin "	хяна- "контрóлировать"
<i>kirmay</i>	<i>k'irmaç :</i> ~ <i>ožasu</i> " petit neige qui parvient à peine à couvrir le sol "	хярмаг "порóша"
<i>kirya-</i>	<i>k'irg.a-</i> " couper "	хярга- "стричь"
<i>kirsa</i>	<i>girsā</i> " espèce de renard de petit taille qui vit dans les dunes "	хярс "корсáк"
<i>kirjang</i>	<i>k'irožan</i> " pénis "	хярзан "промéжность"

この対応を公式化すれば,

$$\text{Mo. } i = \text{Urd. } i = \text{Kh. } i\grave{a} \dots\dots\dots (1)$$

となる。

これに対して、蒙古文語の *i* に、オルドス、ハルハ両方言で母音 *a* が対応している次のような例がある。

Mo.	Urd.	Kh.
<i>miqan</i>	<i>maza</i> " viande "	мах "мáсо"
<i>niya-</i>	<i>nā-</i> " coller "	наа- "клéить"

蒙古文語の第1音節のiを支持するのは、いわゆる「中世蒙古語」に属する諸資料の *miqan*, *ni'a-* といった形やブリヤート方言の *МЯХЭН*, *НЯа-* というあらわれである。

上の2語と、それらに接尾辞がついて得られる一連の派生語については、

Mo. *i* = Urd. *a* = Kh. *a* (2)

という対応関係が成り立つ。このように、ハルハ方言の母音 $i\bar{a}$ と *a* とは、それぞれオルドス方言の *i* と *a* に対応する異なった母音として扱わねばならない。ハルハ方言の「不完全な折れ」($i\bar{a}$)はオルドス方言の *i* に、「完全な折れ」(*a*)はオルドス方言の *a* (「折れ」)にそれぞれ規則的に対応しているのである。

1.1. 次の例では、オルドス方言の長母音 \bar{a} がハルハ方言の $i\bar{a}$ (正書法では *иа*)に対応していて、上述の(1)と(2)の対応のいずれにも当てはまらないようにみえる。

Mo.	Urd.	Kh.
<i>kiya</i>	$k^c\bar{a}$ ①	<i>хиа</i> [$x\bar{i}\bar{a}$] 《паж》
<i>kiyar</i>	$k^c\bar{a}q$ ②	<i>хиаг</i> [$x\bar{i}\bar{a}g$] 《вострѣн》

①《officier attaché spécialement au service d'un prince》

②《nom d'une plante》

しかし、オルドス方言の子音 *k* (前寄りの軟口蓋閉鎖音)は、上の例や少数の外来語を除いて、もっぱら前舌母音と結合し、他方で後舌母音とのみ結合する子音 *x* (後寄りの軟口蓋摩擦音)と互いに補い合う分布をなしている。ストリート (J. C. Street⁽⁸⁾)は、前舌母音と結合する *k* と後舌母音と結合する *x* とを同一の音素 /*k*/ とみなし、後舌母音と結合する少数の *k* を音韻的に /*ky*/ と解釈した。このようにオルドス方言の $k^c\bar{a}$ という例外的な結合のうち、子音の口蓋化として母音 $*i$ の痕跡を認めることができることから、上の2例は

Urd. *i* = Kh. $i\bar{a}$ (1)

の対応の特殊なあらわれとみなすことができる。

1.2. 次の例では、オルドス方言の i に対してハルハ方言で a が対応している。

Mo.	Urd.	Kh.
milaʒa	milā ^①	МАЛИА《КНУТ》

①《 la lanière qui fixe le fouet à son manche 》

ハルハ方言では上掲の МАЛИА [mal^{ī}ä] という形とならんで、第1音節に Я(īä) をもつ МЯЛГА という形もみえるが、⁽⁹⁾ 後者は辞書に「文語体」という指示があるように、蒙古文語形から借用された形であろう。子音 Г の存在はこの推定を裏付ける。ハルハ方言における МАЛИА という形は、第2音節に иа(īä) と、母音^{*}i の痕跡が認められるところからすれば、第1音節の母音 a は、「折れ」によって得られたものでなく、むしろ第1音節の母音と第2音節の母音の音位転換 (metathesis) によって説明されるべきものと考えられる。

1.3. 次の例では、オルドス方言の i に対してハルハ方言で Я(īä) でなく И(i) が対応している。

Mo.	Urd.	Kh.
bida	BiDa 《 nous 》	БИД 《 МЫ 》

ポッペによれば、⁽¹⁰⁾ 蒙古文語の bida に対応するハルハ方言形は b^{ī}ädde ~ bidde であるから、文章語の БИД の И を単なる正書法の約束と見なしうるかも知れない。たとえば、БИД とせずに БИД と綴ることにしたのは БИ《 Я 》の複数という見地から (БИ + Д) 母音字 И を残した、というように。しかし、ウラディミルツォフによれば、⁽¹¹⁾ bidä ~ biäd という形をもつ方言群と、bidě ~ bid という形をもつ方言群があり、ハルハ方言は後者に属するという。そもそも蒙古文語では第2音節以降で母音 a と e が区別されていないので、bida と bide のいずれとも決し難い。事実、コワレフスキーは蒙古文語形を bide と転写している。⁽¹²⁾ このような見地から、ハルハ方言の БИД の И が、^{*}bide に由来するものである可能性がでてくる。

これに関連して、表1にあるオルドス方言形の Bilta 《 mèche de fusil 》に

は、同時に Bilt'e および Bêlt'e という形も存在することを指摘しておく。

2. 語頭子音が *j, *ç の場合

蒙古文語の語頭の j̄i-, ç̄i- (a の前) に対して、ハルハ方言では dž̄a-, tš̄a- が対応する単語 (「不完全な折れ」) と、dza-, tsa- が対応する単語 (「完全な折れ」) の 2 種類がある。dž̄a-, tš̄a- (現代正書法ではそれぞれ жа-, ча-) を「不完全な折れ」とみるのは、かつて存在した *i の影響によって語頭子音が口蓋化を保存していることに *i の痕跡が認められるからに他ならない。他方、dza-, tsa- (現代正書法では за-, ца-) があらわれる単語では、かつて第 1 音節に *i が存在したであろうにもかかわらず、語頭子音が口蓋化特徴を失っていることから、*i の痕跡は全く認められない。

ところで、オルドス方言では、同じ蒙古文語の語頭の j̄i-, ç̄i- に対して、Dž̄i-, tš̄' i- が対応する単語と Dž̄a-, tš̄' a- が対応する単語の 2 種類がある。そして、重要なことは、オルドス方言で Dž̄i-, tš̄' i- をもつ単語はハルハ方言で dž̄a-, tš̄a- をもち、オルドス方言で Dž̄a-, tš̄' a- をもつ単語はハルハ方言で dza-, tsa- をもっていて、この関係は後で検討する少数の場合を除いて規則的である。つまり、ハルハ方言の「不完全な折れ」とオルドス方言の i が対応し、ハルハ方言の「完全な折れ」がオルドス方言の a (「折れ」) に対応するという相関関係がここでもそのまま成り立っている。まず表 2. を参照されたい。

表 2.

Mo.	Urd.	Kh.
jibar	.dž̄iwar "froid accompagné de vent"	жавар "стужа"
jida	.dž̄ida "lance"	жад "копьё"
j̄iysaγa-	.dž̄iγsā- "mettre en rang"	жагсаа- "построить в ряд"
j̄ilabč̄i	.dž̄ila.b'tš̄'i "marmite en fonte de petit format"	жалавч "котелок"
j̄iran	.dž̄ira "soixante"	жар "шестьдесят"
j̄irγa-	.dž̄irγa- "etre heureux"	жарга- "быть счастливым"
č̄ibaryan	tš̄'iwag.a "jújube"	чавга "жужуб"
č̄ida-	tš̄'ida- "avoir le talent de"	чад- "мочь"
č̄ina-	tš̄'ina- "faire cuire dans un liquide"	чана- "варить"
č̄inar	tš̄'inar "essence, nature"	чанар "качество"
č̄indaryan	tš̄'in dag.a "lièvre blanc"	чандага "заяц-беляк"
č̄ingna-	tš̄'iŋna- "écouter"	чагна- "слушать"

上の対応を公式化すれば

$$\text{Mo. } i = \text{Urd. } i = \text{Kh. } \acute{C}a \dots\dots\dots (3)$$

と表すことができる(\acute{C} は口蓋化子音 $d\check{z}$, $t\check{s}$)。

これに対して、同じ蒙古文語の $\check{y}i-$, $\check{c}i-$ に、オルドス方言で $D\check{z}a-$, $t\check{s}^c a-$ が、ハルハ方言で $dza-$, $t\check{s}a-$ が対応しているものとして、次のような例がある。

Mo.	Urd.	Kh.
$\check{y}i\check{r}a-$	$D\check{z}\check{a}-$ “indiquer”	заа- “указывать”
$\check{y}i\check{r}ar$	$D\check{z}\check{a}r$ “musc”	заарь “мускус”
$\check{y}i\check{r}asun$	$D\check{z}agasy$ “poisson”	загас “рыба”
$\check{c}irai$	$t\check{s}^c ar\check{a}$ “visage”	парай “лицо”

上の蒙古文語の第1音節の i を裏付けるのは元朝秘史や華夷譯語等、いわゆる「中世蒙古語」資料である。上掲の単語のほかにも、蒙古文語の $\check{y}i\check{r}ar$ 《joint》, $\check{y}i\check{r}atuna-$ 《to itch》, $\check{y}iqa$ 《brim》, $\check{c}irda-$ 《to starch》に対するハルハ、オルドス両方言の対応も上と同じであるが、蒙古文語には第1音節に a をもつ形もみられる($\check{y}arar$, $\check{y}ar\check{a}tuna-$, $\check{y}aqa$, $\check{c}arda-$) ほか、他の方言資料(中世蒙古語資料を含む)に第1音節の i を支持する形が見い出せないことから、これらの単語の蒙古文語の第1音節の i は、音声的実体を反映したものでない擬似的な綴りである疑いが残る。

そこで、表に示した4語と、それらに接尾辞がついて得られる一連の派生語を確かな例として、その対応を公式化すれば、

$$\text{Mo. } i = \text{Urd. } a = \text{Kh. } Ca \dots\dots\dots (4)$$

とあらわすことができる(C は非口蓋化子音の dz , ts)。(3)と(4)の対応は、オルドス方言では母音の違いとして、ハルハ方言では先行する子音の性質の違いとしてあらわれているが、その相関関係は疑う余地がない。

2.1. 次の例は、オルドス方言の $D\check{z}i-$ にハルハ方言の $за-$ ($dza-$) が対応していて上述の(3)と(4)の対応からはずれている。

Mo.	Urd.	Kh.
$\check{y}i\check{y}ar\check{a}n$	$D\check{z}i\check{y}\check{a}$ 《destin》	заая 《судьба》

上記のハルハ方言(заяа)とならんで、ブリヤート方言形⁽¹³⁾(заяан)とカルムイク方言形⁽¹⁴⁾(zajān)でも**i*の痕跡が認められないほかモンゴール方言⁽¹⁵⁾(Dziäyān)でも「折れ」がみられる。そこで、問題にすべきはオルドス方言の第1音節の*i*であろう。モスタールト師は、上記オルドス方言形に蒙古文語形 *ĵayaran* と、第1音節に母音 *a* をもつ形をあてているが、これは元朝秘史や華夷譯語の *ĵaya'an* という形を反映したものである。しかし、蒙古語の他の方言で第1音節に母音 *i* をもつ形が全くみられないわけではない。ムカディマツ・アル・アダブ⁽¹⁶⁾には、*sajn ĵiyātu* 《СЧАСТЛИВЫЙ》という形があり、ダグル方言⁽¹⁷⁾にも *džiaa* 《fate, luck》とあることから、第1音節の *i* がオルドス方言だけのものでないことがわかる。現在の段階ではオルドス方言とダグル方言の第1音節の *i* は、ふたつの口蓋化子音には含まれた特殊な環境で、母音 **a* が *i* に変化したのか、それとも元来の母音である **i* が保存されてきたのか、断定することはできないが、これが母音 **i* に由来する可能性も依然として残るので、ここに特殊例としてとりあげた。

2.2. 次の例では、オルドス方言の *tš'a-* にハルハ方言の *ча-* (*tša-*)が対応していて(3)と(4)の対応からはずれている。

Mo.	Urd.	Kh.
ĵingra	tš'angga 《raide》	чанга《СИЛЬНЫЙ》
ĵima-	tš'am (a)- ^①	чам- ^①

①人称代名詞、第2人称単数の斜格形語幹

オルドス方言では、上掲の *tš'angga* 《raide》とならんで、第1音節に母音 *i* をもつ *tš'ingga* という形も見られる。*tš'ingga* という形は、Urd. *i* = Kh. *Ča* という(3)の対応に合致するが、*tš'angga* はオルドス方言内の規則性から逸脱している。

同様に、人称代名詞の第2人称単数の斜格形語幹として、カルムイク方言では *tšam-*、ブリヤート方言では *шам-* と、いずれも語頭子音が口蓋化しており、モンゴール方言では *tš'im-* と *i* が保存されていることから⁽¹⁸⁾、オルドス方言形としては第1音節に母音 *i* をもつ形が期待されるところである。こうして、上の2

語については、オルドス方言が他の蒙古語方言から借用した形である可能性がでてくる。

3. 語頭子音が *s の場合

蒙古文語の si- に対応して、ハルハ方言では、少なくとも現代文章語では、一様に ша- (ša-) があらわれており「不完全な折れ」と「完全な折れ」の区別を認めることはできない。一方で、オルドス方言では、これまで見てきた場合と同様、第1音節に母音 i をもつ単語と母音 a をもつ単語の二通りの場合がある。

まず表 3-a をみると、ここではオルドス方言の第1音節の i にハルハ方言の a が対応している。

表 3-a

Mo.	Urd.	Kh.
<i>sibqa</i>	<i>šiwʰa</i> "boue"	шавх "глина"
<i>sibqar-</i>	<i>šiwʰara-</i> "s'egoutter"	шавхар-"выжимать"
<i>sidar</i>	<i>šidar</i> "proche"	шадар "близкий"
<i>siŷa-</i>	<i>šilg.a-</i> "trier"	шалга-"проверять"
<i>silta-</i>	<i>šilt'a-</i> "etre cause"	шалт-"пользоваться случаем"
<i>sinaya</i>	<i>šinaga</i> "louche"	шанага "разливательная ложка"
<i>sindasun</i>	<i>šindasū</i> "nerf"	шандас "сухожилие"
<i>sirba-</i>	<i>širwa-</i> "agiter la queue"	шарва-"махать"
<i>sita-</i>	<i>šit'a-</i> "prendre feu"	шат-"гореть"
<i>sitar</i>	<i>šit'ar</i> "echiquier"	шатар "шахматы"

これを公式化すれば、

$$\text{Mo. } i = \text{Urd. } i = \text{Kh. } a \dots\dots\dots (5)$$

となる。

次に、表 3-b では、同じ蒙古文語の si- に対して、オルドス方言とハルハ方言でともに母音 a が対応している。

表 3-b

Mo.	Urd.	Kh.
<i>siba-</i>	<i>šawa-</i> "couvrir d'un enduit de boue"	шав-"обмазывать"
<i>sibaŷ</i>	<i>šawaŷ</i> "artemisia campestris"	лаваг "полынь полевая"
<i>sibar</i>	<i>šawar</i> "boue"	шавар "грязь"
<i>siŷa-</i>	<i>šā-</i> "enfoncer"	шаа-"вбивать"

<i>siya</i> ~ <i>siyai</i>	<i>šā</i> "cheville du pied"	шагай "лодыжка"
<i>siyarun</i>	<i>šāra</i> ~ <i>šāru</i> "marc"	шаар "чайнки"
<i>siqa-</i>	<i>šaxa-</i> "presser"	шах- "жать"
<i>siqaγa-</i>	<i>šaxā-</i> "épier"	шагаа- "заглядывать"
<i>sira</i>	<i>šara</i> "jaune"	шар "жёлтый"
<i>sira-</i>	<i>šara-</i> "dorer"	шар- "жарить"
<i>siraljün</i>	<i>šaraloži</i> "espèce d'armoise"	шарилж "бурьян"
<i>siryā</i>	<i>šargā</i> "couleur isabelle"	шарга "солёвый"
<i>sirqa</i>	<i>šarxa</i> "blessure"	шарх "рана"

これらの対応は、

Mo. *i* = Urd. *a* = Kh. *a* (6)

と、公式化される。

オルドス方言で第1音節に母音 *i* をもつ単語と、母音 *a* をもつ単語との間にはなにか違いが見られるであろうか？ Dictionnaire Ordos の索引を利用して、蒙古文語で *siCa-* (Cは子音または子音連続) の構造をもつ単語に対応するオルドス方言形を網羅的に調査すると、オルドス方言で第1音節に母音 *a* があらわれているのは、

$C = b, \gamma, q, r, r\gamma, rq$

の場合であることがわかる。それ以外の場合には、具体的には

$C = bq, d, \check{y}, l\gamma, l\check{y}, lt, m, n, nd, ngl, nt, rb, t$

の場合には、第1音節に *i* があらわれている。

ただし、蒙古文語の *siγla-* 《to sew with small stitches》には、オルドス方言で *šigla-* ~ *šagla-* 《faire le point arrière》と、第1音節に母音 *i* をもつ形と母音 *a* をもつ形の両形が対応している。

ここに一言付け加えるならば、蒙古文語の語頭の *si-* に対するカルムイク方言とブリヤート方言の対応は、一様に *ša-* であって第1音節に母音 *i* はみられない。この発展はハルハ方言のあらわれと等しい。

4. 語頭の *i

蒙古文語の語頭の *i* (*a* の前) に対して、ハルハ方言では一様に *ja* (現代正書法で *я*) が対応していて、語頭子音が **s* の場合と同様、この位置で「不完全な折

れ」と「完全な折れ」の違いは認められない。

オルドス方言では、同じ蒙古文語の語頭の i に対応して、通例、母音 i があらわれている。表 4. を参照されたい。

表 4.

Mo.	Urd.	Kh.
<i>idqa-</i>	<i>idxa-</i> "prohiber"	ятга- "уговáривать"
<i>ilaγa</i>	<i>ilō</i> "taon"	ялаа "мúха"
<i>ilangγui</i>	<i>ilang.γī</i> "plus que"	ялангуяа "осббенно"
<i>ilγa-</i>	<i>ilg.a-</i> "séparer"	ялга- "различáть"
<i>ilmayai</i>	<i>ilmag.ā</i> "qui ne sait rien refuser"	яламгай "слабовóльный"
<i>imaγta</i>	<i>imaγ.t'a</i> "uniquement"	ямагт "всегдá"
<i>inaγ</i>	<i>inaḡ</i> "ami"	янаг "любóмый"
<i>inčaγa-</i>	<i>ints'ag.ā-</i> "hennir"	янцгаа- "ржать"
<i>injāγa</i>	<i>inōžag.a</i> "faon"	янзга "козлѐнок антилóпы"
<i>ira-</i>	<i>ira-</i> "ouvrir en coupant"	яр- "раздвигáть"
<i>irγačin</i>	<i>irg.a'tš'in</i> "chasseur"	яргачин "мяснiк"
<i>irγai</i>	<i>irgā</i> "espèce de chèvrefeuille"	яргай "кизiл"
<i>irjāyi-</i>	<i>irožā-</i> "montrer les dents"	ярзай- "обнажáть ряд чего-либо"

これを公式化すれば、

$$\text{Mo. } i = \text{Urd. } i = \text{Kh. } ja \dots\dots\dots (7)$$

と表すことができる。

しかし、オルドス方言では、次の 1 語（とその派生語）では、蒙古文語の i- に対して語頭に ja- が対応している。

Mo.	Urd.	Kh.
<i>imaγan</i>	<i>jamā</i> 《chèvre》	ямаа 《козá》

蒙古文語の第 1 音節の i に対応するオルドス方言の 2 重の発展（i と a）の中に位置づけて考えれば、上の例をもって、

$$\text{Mo. } i = \text{Urd. } ja = \text{Kh. } ja \dots\dots\dots (8)$$

という対応関係をあらわすことに無理はないであろう。

ちなみに、蒙古文語の語頭の i に対応するカルムイク方言とブリヤート方言の母音も通例 i であるが、Mo. *imaγan* に対応する語ではいずれも ja (Kalm. *jamān*, Bur. ЯМААН) があらわれている。⁽¹⁹⁾

5.

これまでみてきたハルハ方言とオルドス方言との対応を一覧表にして示せば、表5. のようになる。

表 5.

Mo.		Urd.	Kh.	
語頭子音	母音			
<i>b, m, n, g, k</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>iä</i> (1)
		<i>a</i>	<i>a</i> (2)
<i>ǰ, č</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>Ča</i> (3)
		<i>a</i>	<i>Ca</i> (4)
<i>s</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>a</i> (5)
		<i>a</i>	 (6)
ϕ	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>ja</i> (7)
		<i>ja</i>	 (8)

ハルハ方言の「不完全な折れ」と「完全な折れ」が、オルドス方言でそれぞれ第1音節の母音*i*と母音*a*（「折れ」）に規則的に対応しているという事実によって、ハルハ方言の「折れ」を歴史的に説明するひとつの展望が開けないであろうか。第1音節の母音*i*に関して、蒙古文語がハルハ方言のより古い発展段階を反映するとした場合に、蒙古文語の状態から、直接、ハルハ方言の「折れ」を規則的な変化として説明することは困難である。しかし、両者の中間に、オルドス方言にあらわれているような発展段階——これをとりあえず、ハルハ方言の「前段階」と呼ぼう——を仮定すれば、その理解は格段に容易になる。

それは、ハルハ方言の「完全な折れ」と「不完全な折れ」とを、時代的に異なった新・旧二つの変化として切り離して考えることである。すなわち、「完全な折れ」は、ハルハ方言の前段階の状態ですでに第1音節に母音*a*として存在していたものが現代にそのまま継承されていることになる。その「折れ」は、したがって、前段階をさかのぼる・より古い時代に属するものであって、前段階で得られている母音*a*は、その後の歴史では他の母音*a*と、全く同じ取り扱いをうけることになる。

他方、「不完全な折れ」は、前段階の状態では第1音節に保存されていた母音 *i* が、その後のより新しい時代に「折れ」を蒙ったものである。こうして、「不完全な折れ」は、 $i > ja$ という規則的な音韻変化として理解されるのである。この音韻変化の結果はその音声的環境により様々に実現された。

語頭子音が *b, m, n, g, k* の場合には、これらの子音を *C* であらわすと、

$$Ci > Cja > C^i\dot{a}$$

として実現されている。

語頭子音が *ʃ, ʂ* の場合には、これらの口蓋化子音を \acute{C} であらわせば、

$$\acute{C}i > \acute{C}ja > \acute{C}a$$

として実現されている。

そして、語頭では、 $i > ja$ がそのまま現実の形である。⁽²⁰⁾

ところが、語頭子音が *s* の場合には、ハルハ方言の第1音節のあらわれは一樣に $\acute{s}a-$ (*wa-*) であり、「完全な折れ」と「不完全な折れ」との区別がないのみならず、それがどちらの「折れ」であるかも俄には断定し難いのである。それが、前段階の状態で、より古い「折れ」をすでに蒙っていたとしても、あるいは逆に一樣に *i* が保存されていたと仮定しても、現在のハルハ方言の状態としては同じ結果が得られる。ハルハ方言に区別のないオルドス方言のあらわれを前段階の状態として優先的に採用する権利も、われわれにはないであろう。これについて、さらにこれ以上のことを言うためには、より確かな別の証拠が必要である。

ここで、前段階の状態に先立つ、より古い「折れ」に言及しないわけにはいかない。蒙古文語の第1音節の *i* が、前段階よりさらに古い発展段階を反映しているとしたら、蒙古文語の状態から前段階の状態への変化を説明しなければならない。蒙古文語の状態と同じ第1音節の *i* でありながら、なぜあるものだけが「折れ」を蒙り、他は *i* として残ったのか。より古い「折れ」を規則的な音韻変化として説明する必要がある。これに関連して「完全な折れ」を蒙った *i* の多くは、蒙古文語で *qa* および *ya* の前に位置していることが注目に価するであろう。

(例: *miqan, nira-, jira-, jirar, jirasun*) ただし、ハルハ方言の *царай* に対応する *Mo. čirai* と、さらに *заяа* および *ямаа* が「完全な折れ」であるとすれば、これらに対応する *Mo. jiyaran, imaran* はこれに当てはまらない。

現在の段階でこれに結論を出すことはできないが、もしも、より古い「折れ」を蒙った *i* に共通で、しかもそれ以外の *i* には欠けているような音声的な環境を示すことができないとしたら、必然的にもうひとつの可能性を検討してみなければならない。それは、蒙古文語では同じ *i* としてあらわれているものの、「完全な折れ」を蒙った母音は、元来 *i* とは別の（そしてもちろん *a* と異なる）母音だったのではないかと考えることである。これは、伝統的な蒙古語学の観点にたてば、よりありそうにないように思われるかも知れないが、ありえない性質のものではない。

6.

「*a* の前の *i*」の発展として、最後に、第 2 音節の母音 *a* が **aru* の連結をなしている場合を検討する。**aru* の連結は、多くの現代蒙古語諸方言で長母音 *ū* としてあらわれているので、第 2 音節に母音 *u* がある場合の発展との関係も考慮に入れなければならない。

ポッペの説明によれば、⁽²¹⁾**aru* の前の *i* は、オルドス方言でもハルハ方言でも **u* の前の *i* と同様の発展をとげている、という。

**u* の前の *i* が、オルドス、ハルハ両方言で通例「折れ」を蒙り、*u* としてあらわれていることは、ポッペの指摘する通りである。表 6 の例を参照されたい。

表 6.

Mo.	Urd.	Kh.
<i>nīγu-</i>	<i>nū-</i> "cacher"	нуу- "прятать"
<i>nīlbusun</i>	<i>nūlmūsu</i> "larme"	нулимс "слезá"
<i>nīruγun</i>	<i>nūrū</i> "dos"	нуруу "спинá"
<i>nīsun</i>	<i>nūsu</i> "mucus nasal"	нус "сбпли"
<i>kīmusun</i>	<i>xūmūsu</i> "ongle"	хумс "нбготь"
<i>kītuγa</i>	<i>u't'as,a</i> "couteau"	хутга "нож"
<i>jīruγan</i>	<i>ožyrg,ā</i> "six"	зургаа "шесть"
<i>jīru-</i>	<i>ožuru-</i> "tirer une ligne"	зур- "рисовáть"
<i>čīdqu-</i>	<i>ožūdoxu-</i> "verser"	цутга- "лить"
<i>čīqul</i>	<i>ožūxul</i> "étroit"	цухал "узкий"
<i>čīsun</i>	<i>ožūsu</i> "sang"	цус "кровь"
<i>sīdurγu</i>	<i>šūdoγrg,a</i> "droit"	шудрага "честный"
<i>sīluγun</i>	<i>šūlūn</i> "sincère"	шулуун "прямой"
cf.		
<i>bīsīγun</i>	<i>bušū</i> "agile"	бушуу "скóро"

この対応を公式化すれば、

$$\text{Mo. } i = \text{Urd. } \underset{u}{y} = \text{Kh. } u \quad \dots\dots\dots (9)$$

となる。

しかし、オルドス、ハルハ両方言における *a₁u の前の *i 音の発展は、上の図式にあてはまらないものが多い。表7-a. はその例である。

表7-a

Mo.	Urd.	Kh.
<i>bidayu</i>	<i>bidū</i> "stupide"	бядуу "тупой"
<i>bidayuci</i>	<i>bidū</i> 'tš'i "flatteur"	бядууч "подхалим"
<i>birayu</i>	<i>birū</i> "veau dans sa seconde année"	бярүү "годовалый телёнок"
<i>kirayu</i>	<i>k'irū</i> "gelée blanche"	хяруу "йней"
<i>nimnayun</i>	<i>nimnūn</i> "peu épais"	нямнуун "худощавый"
<i>irayu</i>	<i>iragū</i> "mélodieux"	яруу "благозвучный"
<i>itayu</i>	<i>i'irū</i> "perdrix"	ятүү "курчатка"

その対応を公式化すれば

$$\text{Mo. } i = \text{Urd. } i = \text{Kh. } i\grave{a} \quad \dots\dots\dots (10)$$

となり、(9)の対応とは相容れないものである。

一方、表7-b. の例では、ハルハ方言の第1音節に規則的に u (正書法では y) があらわれているものの、オルドス方言にはいずれも母音 i がみられ(最後の2例では母音 y をもつ形と両形がある)、*a₁u の前の *i の発展が母音 *u の前の *i の発展と全く等しいわけではないことがわかる。

表7-b

Mo.	Urd.	Kh.
<i>čilarγun</i>	<i>tš'ilū</i> "pierre"	чулуу "камень"
<i>sibaryun</i>	<i>šiwū</i> "oiseau" ~ <i>šuwū</i>	шувуу "птица"
<i>simaryul</i>	<i>šimūli</i> ~ <i>šumūl(i)</i> "cousin"	шумуул "комар"

ハルハ方言における「*a₁u の前の *i」の二通りのあらわれについて、ウラディエーミルツォフ⁽²²⁾ は次のような説明を与えている：бярүү [bⁱarū] の第1音節の母音 i^ä は、*a₁u の連結が長母音 ū に縮約する前の段階で *i が母音 *a に同化して得られたものであり、шувуу [šuwū] の第1音節の母音 u は、⁽²³⁾ *a₁u が長母音 ū に変化した後、*i が長母音 ū に同化して得られたものである、と。同様の説はポッペにおいても採用されている。⁽²⁴⁾

しかし、われわれにとってこの説はただちに首肯し難いのである。なぜなら、表7-a.にみた(10)の対応は、ハルハ方言の $i\grave{a}$ にオルドス方言の i が対応している「不完全な折れ」に合致していることから、われわれは $\delta\text{яруу}$ [$b^i\text{ar}\ddot{u}$] の $i\grave{a}$ をより新しい時代の「折れ」とすることに傾くからである。これを裏付けるのは、なによりも、ハルハ方言では、第2音節の $*u$ 、および $*uru$ ($> \ddot{u}$) に先行する第1音節の $*i$ が $i\grave{a}$ としてあらわれている例があることである。表8.を参照されたい。

表 8.

Mo.	Urd.	Kh.
<i>kidu-</i>	<i>xudu-</i> "exterminer"	хяд- "убивать"
<i>kirbusun</i>	<i>xurwus(y)</i> "odeur de poils brûlés"	хярвас "гарь"
<i>kirγui</i>	<i>xurg.ʰi</i> "espèce d'oiseau de proie de petite taille"	хяргуй/1/
<i>nitula-</i>	<i>nyʰrʰyl-</i> "tuer"	нятал- "рѣзать"
<i>niluyun</i>	<i>nylun</i> "dégoutant"	нялуун "слащавый"

/1/ <猛禽の総称> Я.Цэвэл <МОНГОЛ ХЭЛНИЙ ТОВЧ ТАЙЛБАР ТОЛЬ>
Улаанбаатар, 1966. 77б а.

これは、つまり、 $*u$ の前の $*i$ にも、より早い時代に母音 u に変化した「完全な折れ」と、 i として保存されてきたものがより新しい時代に $i\grave{a}$ に変化した「不完全な折れ」があると考えることができる。ここで重要なことは、第2音節に母音 $*a$ をもたないにもかかわらず、第1音節の $*i$ が $i\grave{a}$ として「折れ」ているこれらの例からすれば、 $b^i\text{ar}\ddot{u}$ の第1音節の母音も、あえて $*aru$ の母音 $*a$ に同化したとせずとも、より新しい時代に \ddot{u} ($< *aru$) の前で $i\grave{a}$ が生じたとして、充分に説明されることである。

それでは、 шувуу ($\text{šuw}\ddot{u}$) 等、第1音節に母音 u をもつ形は、より古い時代の「完全な折れ」と考えるべきであろうか。われわれは、むしろ、これらも「不完全な折れ」の条件的なヴァリエントと考える。その理由は、第1に、オルドス方言の第1音節に母音 i があらわれていて、これが表6.の「完全な折れ」よりも表7-a.の「不完全な折れ」に近いこと。第2に、Mo. čilarun に対応してハルハ方言で чулуу ([$tšul\ddot{u}$]) と、語頭子音に口蓋化子音があらわれているが、「完全な折れ」では Mo. $\text{čisun} = \text{Kh. ЦУС}$ ([$tsus$]) 等、非口蓋化子音があ

らわれていること。第3に、第1音節のuが、口蓋化子音のあとにのみ見られるという限られた分布をもっていること、である。

これから、*uの前の*iの「不完全な折れ」を推定すれば、第1音節のiは、u、ūの前で一様にi → ju という変化のベクトルを受けたのではあるまいか。それは、語頭子音が口蓋化子音の場合には、či > čju > ču (tšu), šī > šju > šu のように母音uとして実現され、語頭子音が非口蓋化子音の場合には、Cju が実現されるかわりに、*aの前の*iの変化(i > ja)に代替されてCjaとして実現されたものと考えるのである。

オルドス方言の場合は、これとは別の音韻変化が生じた。それは、表6と表8のいずれの場合にも第1音節に母音uがあらわれていることから、第1音節の*iは*uおよび*uruの前で*i > uの変化が起こったと考えられるのである。⁽²⁵⁾そして、*aruの前の*iがiとして保存されていることから、上の変化が生じた時期には、*uruと*aruの区別がなんらかの形でなされていたとせねばならない。つまり、オルドス方言の*i > uの変化は、*aruの連結が長母音ūとして現われる以前に生じたと考えなければならない。

註

- (1) 『モンゴル研究』1612, 1981, 32-49頁。
- (2) G. J. Ramstedt, "Das Schriftmongolische und die Urgamundart phonetisch verglichen", Journal de la Société Finno-ougrienne, XXI: 2, 1903, S. 45-47.
- (3) Б.Я. Владимирцов. 《Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия, Введение и фонетика.》 Ленинград, 1929, стр. 176-177.
- (4) N. Poppe, Khalkha-Mongolische Grammatik, mit Bibliographie, Sprachproben und Glossar, Wiesbaden, 1951, S. 9-10.
- (5) N. Poppe, Introduction to Mongolian Comparative Studies, Helsinki, 1955, pp. 38-39. (以下 Introduction と略す)

- (6) A. Mostaert, "Le dialecte des Mongols Urdus (Sud)", Anthropos, XXI, 1926, p. 863.
- (7) オルドス方言形は
A. Mostaert, Dictionnaire Ordos, seconde éd., New York・London, 1968. (rpt.)
に より, ハルハ方言形は
A. Лувсандэндэв 《Монгол орос толь》
Москва, 1957.
に よる。以下同様。
- (8) J. C. Street, "Urdus phonology : a restatement" Ural-Altische Jahrbücher, Bd. 38. 1966, p. 94.
- (9) Лувсандэндэв, Указ. соч. стр. 254.
- (10) Poppe, Introduction, p. 39.
- (11) Владимирцов, Указ. соч. стр. 132.
- (12) J. E. Kowalewski, Dictionnaire mongol-russe-français, Kasan, 1844-1849, p. 1137.
- (13) К.М. Черемисов 《Бурятско-русский словарь》
Москва, 1973. стр. 254.
- (14) G. J. Ramstedt, Kalmückisches Wörterbuch, Helsinki, 1976
(rpt.), S. 464.
- (15) A. de Smedt, A. Mostaert, Dictionnaire monguor-français, Pei-p'ing, 1933. p. 85.
- (16) Н.Н. Поппе 《Монгольский словарь Мукаддимат ал Адаб》
Москва・Ленинград, 1938-1939.
стр. 316.
- (17) S. M. Martin, Dagur Mongolian : Grammar, Texts, and Lexicon,
Bloomington, Indiana, 1960, p. 177. ただし, Н.Н. Поппе
《Дагурское наречие》 Ленинград. 1930. に は
ᠮᠢᠵᠢᠶ᠋ᠠ 《судьба》と ならんて ᠮᠠᠵᠠᠳᠤᠰᠤᠳᠤᠮᠠᠵᠤᠨ
《суженый судьбою》
という形が採録されている(стр. 77-78)。

- (18) A. de Smedt, A. Mostaert, Le dialecte monguor parlé par Mongols du Kansu occidental, IIe partie : Grammaire, Peking, 1945, p. 37.
- (19) 拙稿「蒙古語諸方言における語頭**i*音の発展」『一橋研究』第6巻3号, 1981. 1-16頁。
- (20) これらの, 現実の音声的なあらわれは多様である。*i* > *ja*という音声変化の結果生じる母音は, ヴァリエントとして平唇の中舌母音*i*, 前寄りの広母音*a*としてあらわれることが観察される。
- (21) Poppe, Introduction, pp. 41-42.
- (22) Владимирцов, Указ. соч. стр. 180-181.
- (23) ウラディーミルツォフはハルハ方言形として *шow̄ȳ* という形をあげているが, これは西部方言の特徴を反映したものであろうか。ここでは文章語形 *шувуу* に直して説明した。
- (24) Poppe, Introduction, p. 36.
- (25) ただし, 蒙古文語の *i* (*u*の前)に対応してオルドス方言の第1音節に *i* が保存されている場合が若干ある。